新見公立短期大学紀要　第28巻
pp. 115－118, 2007

研究ノート

地域看護学Ｉにおける「学校保健」講義の授業評価
―学生による授業評価を行って―

掛屋　純子*

看護学科

(2007年11月7日受理)

本研究の目的は、「学校保健」の講義について学生による授業評価を行い、今後の授業および臨地実習の指導に生かすことである。調査の結果、授業後には80%以上の学生が、講義内容に対して理解が深まり興味・関心をもっていた。講義の内容に最近の時事を取り入れたことから興味・関心が深まったと考えられる。教員は講義の内容を実体験に近づけられるような工夫と知識を十分に身につけ、臨地実習に結び付けられるような講義の形体を作っていく必要があるのではないかと考える。

(キーワード) 学生による授業評価、教育、学校保健

はじめに

本学では教員の授業改善および学生の学習意欲の向上を図るとともに、教育効果の高い授業の実現を目指すことを目的とし、2002年より学生による授業評価を取り入れている。学生による評価は教員各自の教育の評価であり、その結果を今後の教育改善や工夫に反映していかなくてはならない[1]。

地域看護が行われている場は、「公衆衛生看護」、「産業看護」、「在宅看護」、「学校看護（保健)」(以下、学校保健と称す）の4つに大分されている。地域看護学Ｉでは、地域看護の目的、対象及び機能する場について、人々の生活と健康の関係を学び、地域の看護活動のあり方と看護職について理解することを目的として開講している。学校保健においては、対象が健康な児童・生徒・学生および教職員である。看護師を目指して入学してきた学生は疾患のある人々とのかかわりや援助についての学習が中心となっており、「学校保健」はイメージ化しにくく、また興味がないという声も耳にする。そこで、今回「学校保健」の講義について学生による授業評価を用いて、今後の授業への反映や臨地実習の指導に生かすことを目的に調査を行った。

Ｉ．調査目的

筆者が初めて担当した地域看護学Ｉの「学校保健」の講義内容に対して、学生による授業評価を行うことにより今後の授業に反映し、また3年生での臨地実習の指導に生かすことを目的とする。

II．地域看護学Ｉ「学校保健」講義の目的と概要

学校保健の講義は、学校保健の対象（児童・生徒・学生および教職員）の理解と養護教諭の健康の保持増進についての取り組み、役割を理解することを目的とした。また、講義は地域看護Ｉの15コマ30時間のうちのＩコマを学校保健の講義に使用した。

地域看護の場は「公衆衛生看護」、「産業看護」、「在宅看護」、「学校看護（保健)」(以下、学校保健と称す）の4つに大分されている。そのうちの「学校」に場を移した時の学校保健の法的基盤、また養護教諭や学校全体、地域での対象すなわち児童・生徒・学生および教職員に対する健康の保持増進についての取り組みを紹介した。また、「学校保健」誕生の歴史にも触れた。

III．調査方法

１．調査対象

地域看護学Ｉ「学校保健」の講義を受講した看護学科2年生64名。

２．調査期間

2007年6月28日、地域看護学Ｉ最終講義終了後。

３．調査方法

筆者が今回初めて担当した6月14日の「学校保健」の講義に対して、地域看護学Ｉの講義最終日に、本学で使用している授業評価[2]と同様の内容のアンケートを配布し、

*連絡先：掛屋純子　看護学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

回収を行った。

4．分析

分析にはExcelを用いて単純集計を行った。

5．倫理的配慮

アンケートは無記名とし、個人が特定されないこと、得られたデータは統計的な処理を行うこと、またこのアンケートへの協力の有無により地域看護学Ⅰの成績への影響はないことを口頭と書面にての説明を行い、アンケートの回収により同意を得たこととした。

Ⅳ．結果

アンケート回収は64部中54部（回収率84.3%）であった。

アンケート結果は以下に示す（図1）。「私はこの授業のシラバスを事前に読んだ」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、20人（37.1%）、どちらともいえないに回答した者は、7人（12.9%）、あまり当てはまらない、全く当てはまらないに回答した者は27人（50%）であった。「私は予習をしてこの授業に臨むようにした」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、3人（0.5%）、どちらともいえないに回答した者は、9人（16.6%）、あまり当てはまらない、全く当てはまらないに回答した者は42人（77.7%）であった。「私はこの授業の後に復習するようにした」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、8人（14.8%）どちらともいえないに回答した者は、14人（25.9%）、あまり当てはまらない、全く当てはまらないに回答した者は、32人（59.2%）であった。

「私はわからないことについて教員に質問した」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、8人（14.8%）、どちらともいえないに回答した者は、19人（35.2%）、あまり当てはまらない、全く当てはまらないに回答した者は、27人（50%）であった。

「授業に対する教員の意欲・熱意が感じられた」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、52人（96.2%）、どちらともいえないに回答した者は、1人（0.2%）、あまり当てはまらない、全く当てはまらないに回答した者は、1人（0.2%）であった。

「授業の狙いは明確であった」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、52人（96.2%）、どちらともいえないに回答した者は、2人（0.4%）であった。「教員は十分な準備をして授業に臨んでいた」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、53人（98.1%）、どちらともいえないに回答した者は、1人（0.2%）であった。「教材・資料配布等は適切であった」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、52人（96.2%）、どちらともいえないに回答した者は、2人（0.4%）であった。「受講するうちにこの科目に対する理解が深まった」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、47人（87%）、どちらともいえないに回答した者は、6人（11.1%）、あまり当てはまらない、全く当てはまらないに回答した者は、1人（0.2%）であった。「受講するうちこの科目に対する興味関心が深まった」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、45人（83.3%）、どちらともいえないに回答した者は、6人（11.1%）、あまり当てはまらない、全く当てはまらないに回答した者は、3人（0.6%）であった。「板書や視聴覚教材の利用の仕方は適切であった」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、53人（98.1%）、どちらともいえないに回答した者は、1人（0.2%）であった。「この授業を受けてよかったと思った」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、52人（96.2%）、どちらともいえないに回答した者は、2人（0.4%）であった。「この授業は総合的に見て高く評価できる」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、52人（96.2%）、どちらともいえないに回答した者は、2人（0.4%）であった。

Ⅴ．考察

1．学生の学習意欲を高める工夫

「私はこの授業のシラバスを事前に読んだ」「私は予習をしてこの授業に臨むようにした」「私はこの授業の後に復習するようにした」の回答は、いずれも50%以上が全く当てはまらないと回答していた。専門職教育としての看護教育カリキュラムの理論モデル[3]では学習経験の基準として、学生が学習に積極的にかかわれるような環境を用意するといわれる。すなわち授業効果を高めるためには、事前に講義の内容や予習すべき点を資料として配布する工夫が必要であったと考える。事前に授業に関係する資料を目にすることで学生は、興味を示し資料に対する疑問や問題点についてあらかじめ思考することができ、授業への積極的参加やより深い理解へとつながると考えられる。

「私はわからないことについて教員に質問した」の質問に対しても全く当てはまらないと回答した者が全体の50%と高かった。この結果からは教員は講義の内容について学生が質問をしやすい環境・雰囲気づくりや配慮を求められると考える。環境や雰囲気作りには、前述のように講義前に授業の資料を事前に配布することで、講義の疑問点を思考させ質問する積極性を生じることが可能になり、さらには学習意欲の高まりへとつながると考える。また、教員は質問のしやすい環境づくりをすることと同時に学生の学習内容の理解度に対して教員側から質問を投げかけ確認することも必要となる。

学生が「学習の主人公として見る」[4]こと、つまり学

生自らの主体性を大切にすることは教員にとって重要であり、学生自身がみずから学ぶという意識を高めることは学習への主体性や積極性を伸ばすことが可能になると考える。そのためには、学生の学びと教員の学びの出会いは必要であり、それらを共有しあう「関係づくり」は重要である[5]といわれているように、教員は環境の配慮にとどまらず、学生と共に学ぶ姿勢が求められるのではないかと考える。この共に学ぶことは教員と学生の相互作用により、学生は学習体験から意味を引き出すことができる[6]。以上のように教員は学生個々の学びの程度を理解し補う、この繰り返しによって学生は学習意欲を高め、効果的な教育の提供につながることが考えられる。

2．学生の講義に対する理解の深まりと興味・関心

「受講するうちにこの科目に対する理解が深まった」、「受講するうちこの科目に対する興味・関心が深まった」に非常に当てはまる、まぁまぁ当てはまるに回答した者は、共に80%を超えていた。この結果は、講義内容に最近の時事として麻疹の流行を取り入れ、保健委員会や抗体検査などの学校保健での対策など実際際学生が身近に経験していることを例に取り上げ説明したことがより興味を高めたのではないかと考える。学生の理解の深まりや興味・関心の高さは、学生の学習意欲を高かめ、3年次生で行う学校保健室実習への興味・関心へとつながる良好な結果が得られたと考える。特に学校保健は、対象が

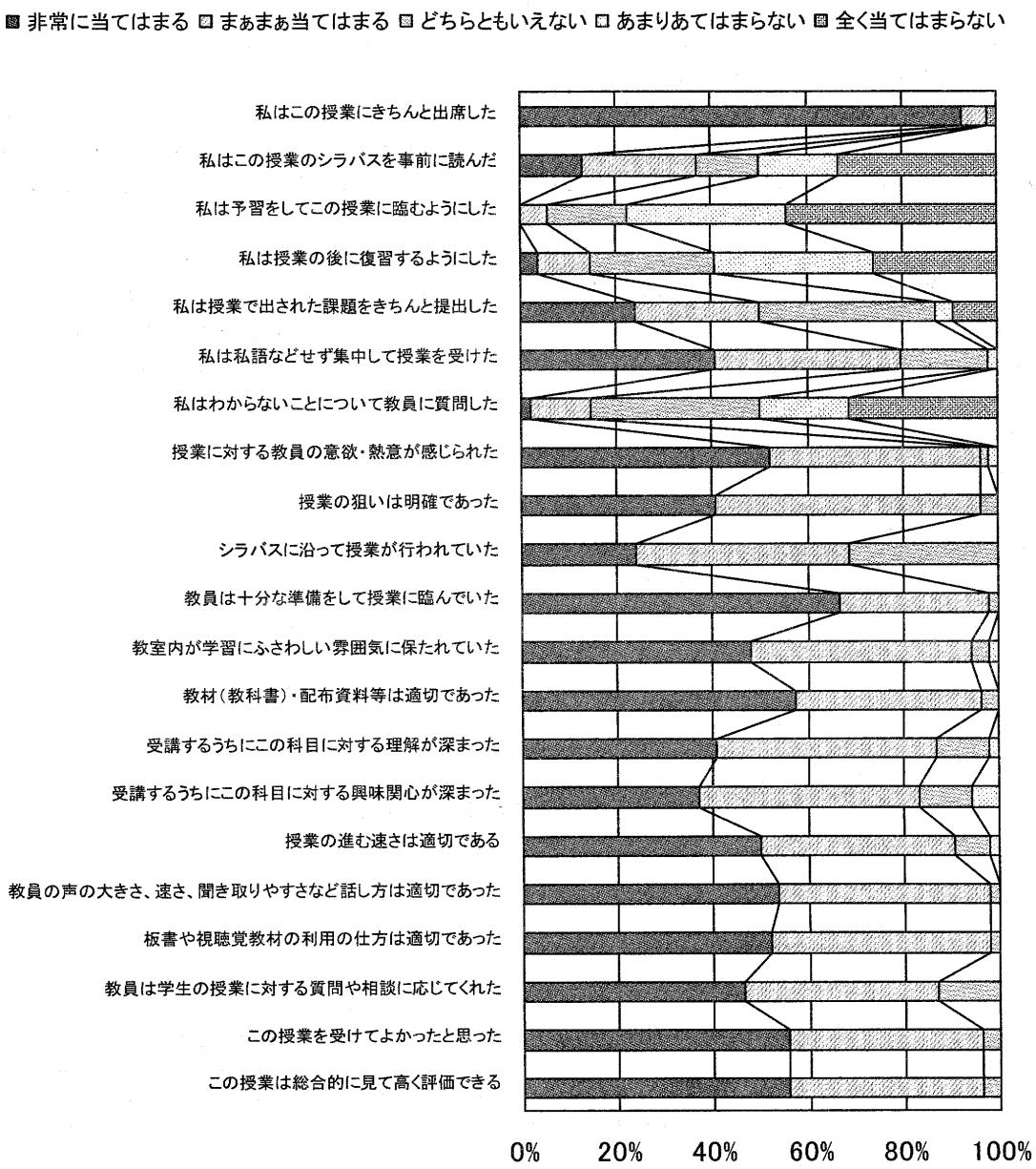

図1　学生による授業評価

健康な児童・生徒・学生および教職員であり、学生が今まで学習してきた疾患を伴う対象とは異なる。また、授業前に学生に学校保健および養護教諭のイメージをたずねると、「学校保健に関して養護教諭だけが学校で活躍している」、「保健室にいつもいる」、「怪我や病気の学生の手当て・看病」というイメージは強い。しかし、実際に学校で対象の健康を守っているのは、養護教諭のみならず担任、教職員および保護者や地域との連携と幅広い。また、養護教諭は健康面の保健指導や健康管理だけでなく、室内環境、グラウンドの整備や水質などの幅広い環境についても対象がよりよくすごすための配慮を行っている。これらのことを講義で学ぶだけでは、学生にとってイメージ化されにくく十分に理解できたとは言えない。牛山[7]は「教育はいま、「ことば」では学べない「学び」に還るべきではないか。」と述べている。看護は実践の科学とも言われるように、実体験が大きな学びの習得につながる。つまり講義は基礎的な知識の習得の場であり、学生はその知識をもとに学校保健室実習で実際に体験し、学ぶ。講義はいわばそのためのレールであるともいえる。そのために、教員は講義の内容に最近の感染症などの社会的な背景などを盛り込みイメージ化させることで実体験に近づけられる。このような工夫と必要な知識を十分に身につけ、学生の理解の深められるよう、さらには興味・関心を高めるための努力が必要となってくる。また臨地実習では教員は学生が学んだことを統合できるよう促す[8, 9]ことができるように指導することが求められる。講義と臨地実習での学生の学びをそれぞれに活かし還元していくことでよりよい教育につなげる努力を継続して行うことが重要であると考える。学生による授業評価によって教員には授業改善が求められ、創意工夫を繰り返しながら学生の学習意欲の向上に寄与しなければならない。学生の授業評価を真摯に受け止め、一喜一憂することなく自己の教育方法を振り返り教育効果の高い授業の実現を目指していきたい。

謝辞

調査を行うにあたって快くアンケートにお答えくださいました学生の皆様に心より感謝いたします。

文献

1）新見公立短期大学:　学生による授業評価，(2)，2003
2）新見公立短期大学:　学生による授業評価，(2)，2003
3）安酸史子　監訳:ケアリングカリキュラム　看護教育の新しいパラダイム，医学書院，101，1999
4）岩辺泰史:「新しい学力」とこども，大月書店，103，1994
5）牛山栄世:「学びのゆくえ」授業を拓く試みから，岩波書店，151，2001
6）岩辺泰史:「新しい学力」とこども，大月書店，100，1994
7）牛山栄世:「学びのゆくえ」授業を拓く試みから，岩波書店，170，2001
8）Torrance，E.P.:Predicting the creativity of elementary school children and the teacher who "made a difference." Gifted Child Quarterly，25，55-62.1981
9）Wang，A.M.，&Blumberg，P.: A study on interaction techniques of nursing faculty in the clinical area. Journal of Nursing Education，22，144-151.1983
10）小西正雄:消える授業　残る授業　学校神話の崩壊の中で，明治図書，1997
11）藤田英典:黒崎勲，片桐芳雄他:教育学年報9　大学改革，世織書房，2002.

Evaluation of Teaching in the Lecture "School Health" in Community Nursing I
－Students' Evaluation of Teaching－

Junko KAKEYA[1)]

[1)]Department of Nursing , Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

The purpose of this study was to assess students' evaluation of teaching in the lecture "School Health" and to obtain data useful for future classes and instructions in clinical practice. As a result of a survey, more than 80% of the students considered that they had achieved a deeper understanding of and were interested in the contents of the lecture. Instructors should find ways and have adequate knowledge to relate the contents of the lecture close to actual experiences, and establish a lecture form connected to clinical practice.

Key words: Students' evaluation of teaching, education, School Health